令和２年 11 月３日発行

http://setagaya5.boy.jp/scout/

SETAGAYA さく5 11月号

発行 ／ ボーイスカウト世田谷第５団広報部

ビーバー隊｜割り箸鉄砲作り／カニ釣り

カブ隊｜赤い羽根共同募金／大山登山／ハイク大山街道

ボーイ隊｜てくたくハイク／サイクリング準備・ミニラリー

ベンチャー隊｜SUP・カヌー訓練

ローバー隊｜スカウトとして、デザイナーとして

会議報告

会議予定

編集担当より

リニューアル

第３号

特別寄稿

副団委員長

花俣裕二｜変えなくてはならないもの、変えてはならないもの

変えなくてはならないもの、変えてはならないもの

副団委員長 花俣裕二

Hello, there!! スカウト諸君

私は、今年の 3 月末をもって団委員長を退任しました。通算 20 年団委員長を務めてきた事になります。その間、折に触れ 5 団の全ての皆さんに言ってきた事があります。それは「ルーティンを見直す」という事です。

ルーティンというのは、繰り返し定常的に行う作業/動作の事です。それは、毎日であったり毎月であったり、もしかしたら毎年行われるものかもしれません。例えば、団行事であったり、「さくら」を発行することであったり、夏季舎営、スキー訓練、班集会かもしれません。

常に「今までのやり方で良いのか？ もっと良いやり方があるのではないか？」と、前例踏襲になりがちな活動の中で、改善/改良すべき事はないかと疑問に思って欲しいという事です。

団委員だけでなく隊リーダーや班長・組長においても、自問したり班員と話し合ったりする事が大事です。班や隊や団の運営方法やプログラム内容などを、変化を恐れず見直すことが大事です。しかしだからと言って、何でもかんでも今までやってきたやり方を否定するという事ではありません。問題点を探り出し改善するという事です。問題点がない場合は従来通りで良いと思います。ただし、それは、現時点で問題が無いという事にすぎません。次に見直す時には改善や改良が必要かもしれません。

問題点を探し出すためには、好奇心を持つことがとても大事だと思います。物事を良く観察する事でもあります。

今の世の中はスマホや PC を使えば瞬時に知識を得る事が出来ますが、そこで得た知識は誰かが検討した最善と思われる果実です。そこには導き出された過程が書かれていないので、その妥当性を自ら検証できないことが多いと感じます。最終的な結果しか書かれていないので、問題が発生した時に、遡って解決策を探ることが難しいのです。過程から導かれる本質を理解した上で、残すものと捨てるものを選択する事が重要だと思います。

そのために、常日頃から団や隊の活動を良く観察し、なぜそういうやり方をしているのかというソースデータに当たることが必要だと思います。

ボーイスカウトの良いところは、身体一つで何とかしようとする事です。大自然の中で文明の利器を使わず生活するという、人類が 10 万年以上培ってきた五感というアナログなツールを磨き上げよう

としているからです。スカウト活動を通じて、君たちの問題点抽出能力は確実に向上しています（私が保証します）。

これは、君たちが将来社会に出たときに極めて重要な資質となるでしょう。

さて、世の中はコロナ禍で大変です。皆さんの会社、学校や家庭においても、今までと生活様式を変えなくてはならなくて不便を感じることが多いでしょう。でもこれはある種のチャンスかも知れません。

世の中の不要不急が見えてきたのです。本当に大事なものは何か、時代の変化を五感で感じて下さい。そして、君たち自身でアフターコロナの世の中をデザインしてください。平時では難しいことも未曽有の事態の中では意外と易しいかもしれません。

「自分の頭で考え、実行する」という**「5団の理念」**を是非実行してください。

2020 年 10 月 11 日（日）

割り箸鉄砲作り

ビーバー隊隊長

草島隆行

　コロナの影響で減らしていた屋内プログラムを久々に行いました。今回は企画を永島副長と堀江副長にお任せし、割り箸鉄砲作りをしました。
　割り箸を輪ゴムで止めていきますが、普段やり慣れないせいか難航するスカウトが出るのはいつものことですが、出来た子が手伝うなど成長も見られました。マジックで思い思いに色をつけたあとは、紙コップで的を作ります。みんなで工夫して倒れやすそうな低得点の的や倒れづらそうな高得点の的を作りました。
　それぞれ作りあげた後は横に並べて全員で協力して倒すまでの時間を競うタイムトライアルをしました。

2020 年 10 月 25 日（日）

カニ釣り

ビーバー隊隊長

草島隆行

　本来都心ハイクとする予定でしたが、複数の保護者の方々からのリクエストもあり、寒くなる前にカニ釣りをすることとしました。ありがたいことにスカウト数が増える中、今回は私と小針君しかリーダーがいないということで、安全確保のため保護者の参加を条件としましたが五名のスカウトの他に二組の見学者に参加頂きました。
　去年は大森海岸から歩いたところ、距離の割には埋め立て地ということで冗長だったため、今回は素直に大森からバスを使いました。到着後、割り箸とタコ糸で仕掛けを作ります。中にはお父さんのアドバイスでエサを付ける用にグリップを持ってきたスカウトもいました。エサは比較用に三種類のイカ（全部つまみですが）を用意してみました。昼食後、さっそくスポットに移動して釣り開始です。一時間半ほどの時間があっという間に感じるほど親子で黙々と釣りをしました。釣果は全員で 100 匹ほど、最後は海に逃がして帰ってきました。偶然ではありますが、絶好の天気にも恵まれて楽しく無事に終えることが出来ました。

2020 年 10 月 4 日（日）

赤い羽根共同募金

カブ隊副長

高木裕美

　例年 10/1 都民の日に活動している恒例の募金奉仕活動ですが、今年は新型コロナの影響で都民の日が授業のため 10/4 日曜日に行いました。
　活動前にデンリーダーと副長からスカウトに「大声で呼びかけない」「お金に触らない」「羽根は手渡しせず寄付してくださった方に取っていただく」など諸注意を伝え、感染拡大防止に十分留意して活動しました。
　始めは恥ずかしそうにモジモジして下を向いたり、足が痛い～、人が歩いてない～、と弱音を吐くスカウトもいましたが、徐々に慣れてくると小さな子供が募金を入れやすいようにしゃがんであげたり、募金者が台紙の羽根を取りやすいよう工夫したりと楽しそう。結果多くの方が、足を止め自転車をとめ募金してくださいました。奉仕中「えらいね」「がんばってね」「ごくろうさま」と温かい声をたくさんかけてもらい、スカウトたちはとても嬉しそうで、終了時間を告げると「もっとやりたい！」と楽しかった様子でした。「あかいはね」は、勇気と良い行いのシンボル。地域の方々と触れ合う機会が少ない中ですが、良い行いをして人の温かさに触れて、奉仕の心を養うことができました。
　ご協力くださった保護者の皆様、募金に来てくださった皆様、ありがとうございました。来年は、大きな声で呼びかけができるといいですね。

4 組しか

小川優祐

　お金がいっぱい集まって人のためになることができてよかった。
　「えらいね」と言ってくれる人がいたから、うれしかった。
　障害のある方やこうれいの方に助けがどとくのだろうと思ったから、ぼきん活動ができて良かったと思う。

2020 年 10 月 11 日（日）

大山登山

カブ隊副長

三園真也

　ギリギリのギリまで決行するか悩む天気でした。前日まで台風の進路に振り回されましたが多少の雨は覚悟で前夜決行確定。
　当日は曇りメインで雨にこそ降られませんでしたが、山頂は台風の風が残っていてビュービューでとにかく寒かった！
　そして下山を始めると晴れ間がどんどん広がり、途中で相模湾も綺麗に見えました。そんな天気で移動のバスやケーブルカーも空いてて良かったし。
　出発時、制服で来てしまい着替えに戻る参加者もいてどうなるかと思いましたが、見事に追いかけ合流成

功！最終的には予定時刻で解散、怪我人、脱落者も無くプログラム終了です。
　ひとつ心配なのが翌日のリーダー達の筋肉痛や関節痛です……（汗

3 組 DL

都筑竜彦

台風の進路次第では中止となっていたかもしれない大山登山、進路転換のおかげで決行！

iPhone の歩数計の記録では約 20,000 歩、距離にして 13.5km、参加スカウト 14 名全員、登頂・下山に成功！ 小雨ぱらつく曇り空ながら、上りは Tシャツ 1 枚で OK、山頂は強風の雲の中 13 度という寒さで何枚も重ね着、下山途中から晴れ渡り展望広場からは、遠くの地平線上にスカイツリー。

スカウトのみんなは、1 日で山の天気の移り変わりを経験でき、実は上りよりも下りの方が下半身が辛いという体験を身をもって行い、とても充実した登山であったと思う。更に、下山時には野生のシカが 5m 先に現れるオマケ付き！

1 組しか

浜田一陽

この日は、6 時 30 分集合でねむかったし、さむかったが山ちょうまで行くと、たっせいかんと、そこで食べたおにぎりがすごくおいしかった。

しかも、と中でいいけしきもみれ、まじかでしかも見れて、自ぜんの楽しさをしった。

2 組しか

山口祐

雨になりそうでしたが、行けて良かったです。

見晴台から見る景色はとてもきれいでした。

少し天候が悪くて、頂上からは景色が見れず残念でした。でも、頂上に着いた時、とても嬉しかったです。

3 組しか

渋谷陽太

行きは岩道を登って大変でしたが、帰り道の展望台で遠くに東京スカイツリーが見えて嬉しかったです。また来年も行きたいです。

4 組くま

佐藤瑠仁

僕が行ったのは大山登山です。山頂に着いたとき風が吹いていました。周囲では皆様そうにしていたのですが僕はジャンパーを着ていたので寒くありませんでした。

大山には 2 回行きました。前回は、はれていました。今回は一回目と違って霧があったことと風が吹いていたことを思いたいのですが寒さ寒すぎて「寒いなあ」ぐらいしか考えられませんでした。

山頂には上と下があります。「その下に行ったらそんなに風が吹いていないんじゃないかな」とリーダーが言ったのですが僕はそうは思いませんでした。なぜなら同じ場所にいるのですから同じ風が吹くのだと思ったのです、ですが本当に風が下は吹いていませんでした、下に行けば良かったと思いました。しかし、心の中でもう過ぎてしまったことを悔やんでも仕方がないと思いました。下に行けば良かったことを次に活かしたいです。

2020 年 10 月 25 日（日）

ハイク大山街道（赤坂御門～二子玉川）

カブ隊副長

秋山真一

２週間前の大山登山では電車、バス、ケーブルカーを乗り継いで阿夫利神社下社まで行きましたが、今日は徒歩で大山街道（大山道）を歩きます。

電車で永田町に移動し、江戸時代と同じく赤坂御門（赤坂見附）がスタート地点です。門はなくなりましたが、黒田忠之が造った石垣が残っています。

ここから二子玉川まで、ほぼ田園都市線沿いを 15.5km 歩きます。牛鳴坂などの旧道は 246 号線とは違って曲がっていたり坂になっていたり、宮益坂を下って道玄坂を上がることで渋谷が文字通り谷であることを感じたり、三軒茶屋や二子玉川には昔の道標が残っていることを知ったりと、少しは地理や歴史にスカウトたちが興味を持てたらいいなと思います。

とはいえ、永田町→青山一丁目→表参道→渋谷→池尻大橋→三軒茶屋→駒沢大学→桜新町→用賀→二子玉川と 9 駅分を歩いたことが彼らには一番重要で、自信に繋がったようです。

天候に恵まれ、気持ちの良いハイクでした。

4 組 DL

渋谷真紀子

天候にも恵まれ、赤坂見附から気持ちの良いスタートができました。

江戸時代の名所の名残を辿りながらのハイクはとても勉強になり、青山や渋谷、三茶、二子玉川と普段何気なく訪れている街も、なんとなく特別な場所に来たかのように感じられました。

子どもたちは途中疲れを見せながらも、仲間と一緒に 15 キロという長い道のりを、自分の足で歩ききり、タカシマヤが見えたときには安心した表情を浮かべていました。本当にみんな頑張って歩いたと思います。この経験が、今後の一人一人の自信に繋がることを願っています！

ありがとうございました。

1 組うさぎ

福部涼太

９駅も歩くのは初めてで大変でした。足がいたくなって最後まで行けないと思ったけど二子玉川の駅まで歩けたので自分でもがんばったと思いました。

2 組うさぎ

西村颯真

初めて 16 キロも歩いたから、足がその後、筋肉痛になりました。でも、1 日で治りました！ だから、もう一度 16 キロ歩きたいです。

桜新町のサザエさんの像は、いつも車から観てたのだけど、初めてゆっくり見られて嬉しかったです。

3 組しか

山口ヤシュワントライ

大山街道ハイク天気が良くてよかったです。表参道で、鳩が横断歩道を青で歩いて渡っていたことが面白かった。

4 組しか

佐藤馨太

今回は大山街道（赤坂御門から二子玉川まで）を歩きました。18km の道のりを歩いたのでとてもつかれましたが、みんなと歩いたので楽しかったです。

2020 年 10 月 4 日（日）

てくたくハイク

オットセイ班

河田晴太郎

今日はハイキングでした。僕は九品仏から深沢まで歩きました。僕は途中で抜けてしまいましたが、座標の読み方や 50m の計り方などを改めて学ぶことができました。次回もまた何かを学びたいです。また、次長として後輩にスカウト技術を教えていきたいです。

今回は、分からなかった座標も良く分かったのでよかったです。

オットセイ班

長井達大

僕たちの班は河田くんが途中で抜けたので、基本は 3 人でした。計測は 50m ぴったりでジャブジャブ池で行ったゲームも 3 人でも満点でしたが 2 位でした。反省点は帰りの時に遠回りをしてしまったことです。

1 年休隊で遅れていたけど、進級手帳が少しずつ進んでいるのでこのまま早く 2 級を取ろうと思います。

カモメ班

石井優也

今回は、久しぶりの町中での活動で、てくたくハイクでした。てくたくは、カブの頃から何回かやっていましたが駒沢周辺は初めてで、普段もあまり行かない場所なので、地図を見ながら歩くのは楽しかったです。

班員が僕を含めて 2 人だけで、僕が班長代理だったのですが、なるべく目的地までの距離が短くなるようなルートを決めたり、班員がついてきているかどうかの確認をしながら活動するのは想像以上にハードでした。

人数が少なかったので 1 位を取れました。この調子で、次の BS ラリーに臨みたいです。

カモメ班

佐藤彬

班のメンバーが二人しかいなかったけど、そのぶん素早く動けたので遅刻もせずにたどり着けてよかったです。ロープの競技では同着で負けてしまったけど、最終的には巻き返せて最優秀組賞がとれて楽しかったです。

トナカイ班

河津颯太

今日の活動での感想は、ハイクで疲れてしまったが、最後までがんばれてよかったし、ゲームでは負けてしまったが、色々な事が学べてとても良かったです。

トナカイ班

柴沼篤弘

今回の町ハイクは、かなり失敗だったと思います。なぜならこれから行く場所の座標を地図で調べている時に、かなり遅れてしまったからです。なぜこんなことが起きてしまったかというと、おそらく団結力が足りず、結束が足りていなかったからだと思います。この状況を打開するには、チーム内でコミュニケーションを深めることだと思います。トナカイ班の結束が高まったら、他のどの班よりも優秀な班が出来上がると思います。これなら bs ラリーの優勝など、楽にこなせると思います。次も頑張りたいと思います。

トナカイ班

横山優輝

今回の活動は cp ラリーハイクで、計測・追跡信号のキムス・ハイキングをしました。

結果は計測は 3 班同点、キムスは 11/12 点、ハイキングは 2 箇所でした。街中では、3 列になってしまったり、うるさくなってしまうこともあったけど、班長が注意をしていたので良かったと思います。

今回は負けてしまったけれど、11 月の BS ラリーでは上位になれるように頑張りたいです。

2020 年 10 月 25 日（日）

サイクリング準備・ミニラリー

オットセイ班

佐藤陽仁

今回のボースカウトでは、主に BS ラリーの練習で、班ごとに CP を回るゲームをしました。

結果は、72 点中 70 点でオットセイの優勝でしたが、落としてしまった 2 点が、「ゴールに到着した速さ」で他の班に負けてしまった所でした。

負けてしまった原因は、「好きな順番で CP を回る」というルールの中で、1 つの CP で他の班が終わるのを待っていたからだと思います。 そこでまだ行ってない CP に行っていれば、そこの 2 点は落とさずに済んだと思います。

改めて、臨機応変に対応することの大切さを実感しました。

カモメ班

中嶋太輔

チェックポイントごとに自分の今の力を出せたので、良かったと思います。惜しくも 2 位でしたが、とても楽しく出来て良かった。

トナカイ班

長井達大

今日は自転車の点検と BS ラリーのためのミニラリーのようなことをしました。前まではカモメ班が 3 連勝していて、悔しかったので今回頑張ろうと考えていました。そして今回タイム以外は全て一位で勝てました。

なぜ勝てたかというとそれぞれの得意分野で分担したり、作戦をよく練っていたからだと思います。歌の分野は河田くんがみんなに教えてくれて手旗は僕が代表となってやりました。

計測は次長と班長が教えてくれました。ロープはみんなでやったという風にうまく分担できたから勝ったんだと思います。作戦はキムスの時に追跡記号担当と地図記号で分かれたことです。

このように作戦や得意分野を活かしたやり方で BS ラリーも頑張りたいと思いました。

トナカイ班

河津颯太

サイクリングの準備までしたので、サイクリングを頑張って楽しく成功させたいですし、ビーエスラリーも頑張りたいです。

トナカイ班

藤田航成

今日は、手旗信号があまり出来ませんでした。

しかも手旗信号が、時間がかかってしまったので他のラリーが全て回りきれませんでした。

そして、歌を歌うのがリズム感がわからなくてなかなか出来ませんでした。

ロープ結びは、みんな結構得意そうだったので、全部できました。

歩道橋の計測ができなくて残念でした。

帰ってくるのにも時間オーバーしてしまったので残念でした。

次は、BS ラリーです。

トナカイ班も上位を目指してがんばります!

2020 年 9 月 20 日（日）

SUP・カヌー訓練

ベンチャー隊

長井謙介

奥多摩にある白丸湖での活動でした。午前中はカヌーをし、昼食はスタッフさんに作っていただいたカレーうどんをいただき、午後はサップをやりました。活動中は説明を聞くときも、冷たい水に落ちないように常に気を付けていました。特に楽しかったのはサップでした。なぜならみんなで落とし合いをしたのが最高だったからです。これを機に自分も積極的に企画して、活動してみたいと思いました。

ベンチャー隊

中澤道

大田くんの計画のおかげで、今回の sup は有意義な活動となりました。

いままで sup をすることは滅多になかったので、しっかり自分のスキルにするべく真剣に取り組む良い機会となりました。

しかし、1 度落ちると極寒の凍えが待っているのはもう体験したくないです。

次の活動も頑張ります。

ベンチャー隊

阿部哲也

今回、僕は初めてベンチャー隊としての活動に参加しました。記念すべき最初の活動はカヤックと sup でした。行く前はあまり乗り気ではなかったのですが、いざやり出してみるとすぐに夢中になって，「1 人でできるようになる」というミッションもなんなく達成することができました。特に、sup は落ちてもいいという安心感とスリルを同時に味わうことができ、またやっていく中で体勢にかなり自由がきいたので、時間を忘れて遊ぶことができました（落ちた時はとても寒かったですが、、、）。

最初この活動には引率としてリーダーがつくものと思っていましたが、実際には行くのは我々スカウトだけで、ボーイ隊との大きな差を感じました。また、行きたいところに行ける代わりに責任を伴うことも実感しました。今後も先輩を見習って、ベンチャーらしく活動していきたいです。

2020 年 10 月 29 日（木）

スカウトとして、デザイナーとして

ローバー隊

神田貴史

ずっと書くのを引き伸ばしてきた本格的なさくらへの寄稿に、やっと着手できた。なかなか手がつかなかったのは、自身の忙しさを別にして、理由がある。

まず、スカウトである自分にとって、さくらがどのようなものかを話そう。

私は 7 歳のとき 5 団に入団した。そんな私にとって、さくらは最初からとても面白い読み物だった。100 文字にも満たない自分の文章が、何枚にもわたるキラキラした（当時の自分には本当にそう見えていた）月刊紙の一部に記載される喜び。それに、誌面上で他のスカウトの感想を知ることもできる。

スカウト活動の頻度は 2 週間に 1 度ほど。ときにはさらに時間が空いてしまうこともある。他のスカウトと活動の感想を直接言い合う機会は意外と無い。

そこでさくらを読む。すると、他のスカウトも同じ活動をしたはずなのに、自分とまるで違う感想が載っている。これは小学生の自分にとって軽い衝撃であった。今から思えば、とても良い勉強にもなっていたのだと思う。

そんな喜びと驚きをもたらしてくれるさくらは、先月号のさくらで磯田育成会長が書かれていたように、当時は毎月封筒に入れて送られてきていた。

それを開封する時のワクワクを今でも覚えている。

ボーイ隊に上進すると、なぜだろうか感想文の量が自然と増えた。表面的な感想だけでなく、出来事に由来した思想やすこし「大人な」文章が書けるようになっていった。

さくらが発行されると、それを読んだ他のスカウトのお母さんやリーダーから褒められるようになった。これがひそかな快感になっていた自分は、さくら上で「読まれること」を意識して感想文を書くようになった。

それまで読者として楽しんでいたさくらは、いつの間にか自己表現の場にもなっていたのだ。

そして今や、世田谷第 5 団に所属して 16 年である。さくらに登場する人は自分がお世話になってきた方々ばかりである。いつの時代の誰の文章を読んでも勉強になるし、人間性が文章に表れていて面白い。

同時に、自分の文章をこれらの方々に面白く感じてもらいたい、という想いも強くなった。

と、ここまで読んでいただければお察しの通り、私のボーイスカウト人生においてさくらは非常に大切である。

もちろんそれは自分だけではない。さくらを大切に思う人は 5 団に沢山いる。

そんな方々の顔が具体的に脳裏に浮かぶが故に、今回のこのリニューアルに、並々ならぬ強い想いと熱意をもって私は臨んだ。

＊ ＊ ＊

ここからはデザイナーとして、リニューアルの具体的な話をしよう。

事の始まりは 5 月下旬に行われた団会議である。そこで「デザイン系だしやってみないか」というニュアンスで、渡口隊長よりお話を受けた（団会議の最中、議論の流れで突然湧いた話だったので、詳しい事はあまり覚えていない）。

それ以前のことはよく知らないが、前任であった畑崎さんが勇退されるので、新たな編集者を探しているということだった。ホームページもリニューアルしたことだし、併せてさくらもリニューアルしたら良いのではないか、ということになった。

自分はプロダクトデザインの勉強から派生して、映像編集やロゴデザインもすこしかじっていた。しかし素人に毛が生えた程度である。強い自信があったわけではないが、作業環境と熱意だけは揃っていた為、この話を引き受けることにした。

まずはコンセプトを「ポップ&カルチャー」とした。

自身のさくらの体験から、絶対に「読んでいて楽しい誌面」にしたかった。また、さくらの大きな魅力は沢山の

写真であるから、それに拘りたいとも思っていた。さらに、従来は印刷志向が強かったせいかカラーリングに乏しかったとも感じたので、今や Web 上で読まれるためカラー印刷代を気にしなくてよいことを活かして、思い切りカラフルにしようと決めた。これらは「ポップ」として誌面に表現されている。

他方、過去のさくらから引き継ぐべき「良き伝統」として、上記の写真とは別に、表紙左上に旗をあしらった（団会議にて山田さんにご指摘いただきました。ありがとうございました）。次の世代に伝えるべきさくらのスタイルを「カルチャー」として表現したのだ。

偶然ではあるが、今号の花俣副団委員長の特別寄稿のタイトル：「変えなくてはならないもの、変えてはならないもの」そのものである。

新しいさくらの編集体制では、完成するまでに「用意」と「配置」の 2step の工程が必要である。

1．ロゴや素材等の「用意」について

もっとも大事なデザインとして、さくらのロゴ（表紙上部のタイトル）および各隊のバナーを作る必要があった。とりわけロゴに関しては、過去のさくらを参考にして「平仮名 3 文字」と「横長であること」を条件に、時間をかけてデザインした。

まず原案となるサムネイルサイズ（親指の爪ほどの大きさ）のアイデアをできるだけたくさん描いた。考えながら描くのではなく、ペンを自由に走らせるのだ。これはプロダクトを考えるときと同じ方法論である。

意識的には思いつかないようなアイデアでも、深く考えずに自由にペンを動かし続けることで生み出すことが出来る。プロダクトデザインを学ぶと、このような「何も考えずに描く」ことが訓練によって出来るようになる。

5 秒で 1 案のペースでどんどん描いていき、20 案ほど出来たら見直して、良さそうなものをブラッシュアップする。そうこうする内に、だんだん完成に近づいていくのだ。

続いて写真について。

元々自分は、写真に対して一定のこだわりを持っていた。大学のサークル活動の中で良いカメラを触る機会が多かったし、姉からもらった一眼レフを毎週のように使っていた。撮るのも好きだし、人の撮った写真を評価するのも好きだ。

写真が持つ力や効果の重要性も素人ながらにある程度わかっているつもりだ。だから、さくらに載せる写真も重視して、自らも BS 隊活動で積極的に写真を撮るようにした。

日々の BS 隊活動の中では、現場でスカウトのすぐ近くにいる者にしか撮れないような写真となるよう意識して、いつもシャッターを切っている。そんな BS 隊の写真のクオリティの変化に気づいていただけていれば、たいへん嬉しい。

2．各隊の写真と感想文の「配置」について

編集作業はマイクロソフトの Word で行っている。表紙を作り、全体の量を確認し、写真を置いていき…と作業していくが、この作業は正直簡単である。というか、我々が簡単に編集できるよう、渡口隊長が準備してくれている。

最後の修正と発行も渡口隊長が行うので、ローバーが実際にする作業はそれほど多くない。

＊＊＊

さて以上で、発行まで漕ぎつけた。

しかし果たして、これで自分のねらいがさくらに表現できているだろうか？ リニューアル第 1 号が出来上がり、私は自問した。この自問が、今回のこの執筆が遅れた大きな理由である。

この自問もまた、プロダクトデザインのみならず、他ジャンルのデザインにも共通する重要な「工程」である。

自分がデザインし、時間をかけて完成させたその「もの」は、疑いなく自分にとって良い「もの」だと思いたい。ところが、デザイナーにとって話はそう単純ではない。

自分でデザインしたはずの「もの」が、自分で納得いかない「もの」になることがしばしばある。しかもそれは、たいてい時間が経ってはじめて気付くのである。

作っている最中は「もうこれ以上はできない程いいものが出来た！」と思う。しかし作り終わって数ヶ月後あるいは数年後に見返すと、「いったいなぜこんなものを…」という気持ちになりがちなのだ。

これはきっと「デザイナーあるある」なのだろう。

今回のさくらリニューアルでもこの現象を危惧して、感想を書くのを（そして振り返るのを）少し待った。

幸いなことに、2 か月待っても上記現象は訪れていない。今になっても自分としてはそこそこの「もの」が完成したと思えているので、さくらは満足のいくクオリティに仕上がったのだろう。

数年後・数十年後にこのさくらのデザインを見返したとき、自分がどう思うかは当然分からない。それだけ時間がたてば、今とはまた違う感想が浮かぶことだろう。

しかし、今この時点での、スカウトおよびデザイナーとしての自分の想いを書き記すことには、きっと意味がある。

これを読んでくれたあなたも、自分にとってさくらがどんなものであるか、考えてみて欲しい。そして、リニューアルされたさくらをどう思ったか、是非とも私に教えて欲しい。

何年たっても愛されるさくらとなる事を、切に望む。

会議報告

■ 団会議：10 月 31 日（土）20:00 @奥沢地区会館第 1 会議室

- **各隊報告**

- **育成会より**
  - ✓ 10 月活動費集金について。
  - ✓ BS の商品（クラフト）を育成会で作成する案あり。
  - ✓ 12/20（日）クリスマス会用クッキー準備。

- **地区連盟より**
  - ✓ 1 月の新年こどもまつりは中止。代替行事を検討中。
  - ✓ RS の 100 キロは延期。ボーリング大会を検討中。

- **10/18（日）入団説明会**
  - ✓ 5 家族参加。
  - ✓ 3 月の説明会の場所について。

- **けやきネット**
  - ✓ 11 月よりキャンセル料がかかる。

- **石崎副長より**

■ 育成会役員会

- **10 月は無し**

会議予定

■ 団会議：11 月 28 日（土）20:00 @尾山台地区会館第 1 会議室
■ 育成会役員会：集会形式を取らずに随時 LINE で打合せ

編集担当より

編集後記

ローバー隊

清水虎之介

今月号のさくらを担当するにあたって，果たして私に編集作業なんてできるのだろうか，と不安を感じていました（他のローバーもそうだと思いますが）。なんせデザインに関してはド素人なもので…。

しかし，そんな心配は無用でした。先の神田くんの文章にもあるように，編集のフォーマットはほとんど決まっており，複雑な作業はほとんどなかったのです。実際の作業は基本的に，使う写真を選んで，その写真と感想文をイイ感じに配置するだけ。これだけ聞くととても簡単に聞こえますが，とはいえ結局作業は丸一日かかりました。

初めての編集。やるからにはちゃんとやろうと意気込み，神田くん編集のさくらを見返しつつできる限りそれに寄せたり，見た目や区切りが良くなるように配置や写真のサイズを変えたりと，素人なりに工夫しました。そうやって試行錯誤するうちに、気付いたらめっちゃ時間たってる…。ただその工夫が少しでも見やすさとして皆さんに伝わったら嬉しい限りです。

今まで読み手のことをこれほど深く考えてさくらに向き合ったことはありません。今回の編集作業を通じて，さくらの見方が変わりました。また，こうすれば見やすいのでは？ こうすればちょうど収まるのでは？ という試行錯誤が実はとても楽しく，良い経験になりました。

来月号もやってもいいなぁなんて思ったり…。

ローバー隊隊長

渡口要

下の子はもう喃語らしきものを話します。抱っこすると手足をアメーバみたくくねらせながら，「あー」とか「うー」とか言います。「これが無意識か！」と思います。

あるいはちょうど今朝，自分の右手をじっと見つめていました。身体が「よそよそしい他者」として立ち現われてきたのでしょう。それを見て，妻は感動していました。

上の子は今日，『トイ・ストーリー4』で泣きました。「意味」を理解したのです。これも嬉しい出来事でした。

これらは精神分析理論の実例そのものです。難しそうですが，今号の神田くんの文章にもデザイナーの文脈で「深く考えずにペンを走らせること」と「時を経て自作品を客観視すると陳腐化すること」が例にありました。

前者の「自動描画」は〈無意識の発露〉の意味で喃語と同じ。後者の「見返し」は〈他者化〉の意味で「（胎内で文字通り）一体だった自分と母親と世界を（そして右手を）分離し客体化すること（鏡像段階）」と同じです。

これらの「理論」は執筆にも使えます。つまり「第 1 稿の書きなぐり（自動書記）」および「推敲（と陳腐化）」です。文章にも「賞味期限」があるのです。

赤ん坊とデザインと執筆の上記「同じさ」を〈構造〉と呼んだりします。プロフェッショナルとはこの〈構造〉を理解し，〈無意識〉と〈他者〉を自在に操る，つまり「子供」と「大人」を行き来できる人のことかもしれません。